

大学病院の緩和ケアを考える会

ニュース・レター Vol.17 No.2

平成24年12月1日発行

大学病院の緩和ケアを考える会 事務局

〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8 昭和大学医学部 医学教育推進室

E-mail: jimukyoku@da-kanwa.org http://www.da-kanwa.org

編集責任者 高宮有介

-
- ご挨拶
 - 第18回 総会・研究会を開催して
 - 第9回 教員セミナーに参加して
 - 新企画 大学病院フォーラムにご参加ください
 - ホットニュース「緩和医療学会に参加して」
 - クールダウンエッセイ「職場異動報告」
-

ご挨拶



代表世話人 高宮 有介（昭和大学医学部医学教育推進室）

11月に入り、今年も僅かです。1年過ぎるのが加速していく気が致します。生の時間も砂時計のように残り少なくなる実感があります。一日一日を大切に生きたいと願うこの頃です。

年度初めに掲げた6つの事業は順調に進んでおります。第1に、9月1日に第18回の総会・研究会が、東邦大学医療センター大橋病院で開催されました。会場が少し手狭でしたが、その分、活気に溢れた会になりました。お骨折り頂いた中村世話人、栗島世話人、および東邦大学のスタッフの方々、当会世話人の皆様に心から御礼申し上げます。

第2の事業としての「第9回医学生の緩和ケア教育のための教員セミナー」が、10月27日、28日に昭和大学で開催いたしました。模擬授業の作成・発表とともに、教育技法の講義、試験問題の作成過程の検討と問題のブラッシュアップを行いました。斉藤真理世話人による名調子の司会は健在でした。

第3の事業である、医学生向けのテキスト「臨床緩和ケア」の改訂は、各章とも変更し青海社との原稿のやり取りも最終段階です。最新の知見や社会の変化とともに、試験問題や生と死についての内容も盛り込んだ内容となります。項目としては、在宅、高齢者、非悪性疾患、小児等の緩和ケアを追加しています。来年4月の発刊予定です。多くの会員に手に取って頂き、医学生の講義に活用されることを願っております。

第4に、毎年の研究会で好評を博しておりました「ナースのためのワンポイントレッスン」をバージョンアップさせ、雑誌「緩和ケア」の特集号として掲載

致します。すでに全ての原稿を青海社に送付しております。2013年の新年1月号です。こちら、是非、ご覧ください。

また、今年は、2つのアンケート調査が終了しております。第5の事業になります。1995年より5回行ってきた「全国医学部への医学教育調査」です。医学教育は、当会の重点項目であります。さらに、臨床面の改善も当会の目標であり、第6の事業として、「全国の大学病院に対してのアンケート調査」も実施いたしました。皆様の元に調査の催促のお願いが来るかもしれませんが、ご協力をお願いいたします。

来年の日本緩和医療学会では、「大学病院フォーラム」を取り上げて頂く予定です。大学病院で緩和ケアを進める中での課題、工夫し推進している点など交流できればと考えております。

私ごとですが、20年という数字に関わるが多くなりました。昨年は日本ホスピス緩和ケア協会の20周年記念大会の大会長を務めました。今年は、私が開設当初から関わっている長岡西病院の創立20周年記念大会でした。当会も2014年には、第20回を迎えます。さらに、2015年の第20回日本緩和医療学会学術大会の大会長を拝命しました。この会は、パシフィコ横浜で開催され、1万人を越す医療者が集う予定です。サイエンスだけでなく、アートも取り入れ、EBMに基づいた症状緩和とともに、生と死についても熱く討論していきたいと願っております。こちら、ご協力、ご支援を頂ければ幸いです。



第 18 回総会・研究会を開催して

東邦大学医療センター大橋病院 緩和ケアチーム 中村陽一



第 18 回総会・研究会を 2012 年 9 月 1 日 (土) に、開催させていただきました。都心の大学付属第二病院 (いわゆる分院) ですので収容能力に限界があり、院内で一番収容人員を確保できるスペースを使用しましたが私たちの予想を上回る 172 名の参加者にお越し頂きました。遠方からお越し頂いたのにも関わらず、メイン会場にお入り頂けなかった方々も多く、ご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

研究会では、まず当会看護部会から東京医科大学病院の柏谷優子さんに「大学病院でできる家族ケア」をお話いただきました。この「ワンポイント講座“(一時間お話しになるのでワンポイントではないような気がします・・・)”を受けたくて参加したという方々も多く、実際皆さんが困られているテーマであり多くの参加者の真剣なまなざしが印象的でした。

つづいて本学の菊池由宣先生に腫瘍内科医の立場で教育講演をして頂きました。「腫瘍内科医とはいったいどんな人なのか」ということをわかりやすく伝えていただきました。

「治療と並行する緩和ケアとは」というテーマで、当院の各診療科医師、専門・認定看護師が実際にどのように考えているのかをシンポジウム形式で行いました。治療医としての発言が、緩和ケアを専門としている方々からは歯がゆいところがあったことと存じます。しかし、治療医がこのような機会に、患者さんを CT などの画像やデータだけで判断し治療方針を

決めるのではなく、患者さんはどうしたいのかという、今までとは違った視点で患者さんに関われるようになるきっかけになれば、企画者としてうれしいことでもあります。すでに研究会から 1 月たっていますが、何となく院内での緩和ケアに対するとらえ方が変化してきているように感じます。

教育講演 2 では、「大学病院で死ぬということ ～あらためて、緩和ケアについて考える～ -ホスピス医・在宅医が、大学病院に勤めて思ったこと-」というタイトルで、本学大森病院 緩和ケアセンターの大津秀一先生にお話いただきました。ホスピス医・在宅医の経験を積まれてから大学病院(それも緩和ケアに積極的とは言えない大学)で診療をされており、大学病院の緩和ケアの問題点がより一層明らかになったように思えます。

午後のみの開催で、しかも内容を盛りだくさんにしてしまい、参加者の皆様にもう少し、会場とのディスカッションなどを交えられればよかったかと思っており、次年度以降の開催校への引き継ぎとして申し伝えたいと存じます。

この総会・研究会の開催をきっかけに、当院での「治療と並行する緩和ケア」がより推進され、変化が出てくることを楽しみにしています。



第 9 回 医学生の緩和ケア教育のための教員セミナーに参加して

東京医科歯科大学大学院 臨床腫瘍学分野 三宅 智

この度、10 月 27, 28 日に昭和大学で開催された、第 9 回教員セミナーに参加しました。受講する前は、「グループワークで授業を作り込む」というイメージがわからず、期待半分と戸惑い半分という気持ちでした。受講した後は、非常に有意義だったと実感しております。ご指名もあり、ここに 2 日間の内容を時系列で皆さんにご紹介させていただきます。

初日は 13 時開始でした。12 時半に到着しましたが、すでに数名の受講者が着席しており、私も席について開始を待っていました。前後の受講者と歓談していると、隣の先生が同じ高校の出身と分かり、開始前からアイスブレイキングとなりました。斎藤先生の MC

で開始となり、そのテンションの高さに初めはやや驚きましたが、多彩なアイスブレイキングの試みもすべることなく、これからの 2 日間を期待する気持が高まってきました。続く高宮先生の講演は、何度聞いても(?)心に残るものでしたが、今回は自分自身がこれから講義を作りこむこともあり、今までよりも真剣にそのスキルについて観察しておりました。

そして本番のグループワークです。プログラムを見たときは 240 分という時間配分に驚愕しましたが、始まってみると自分の 50 年の人生の中でも最も短く感じた 4 時間となりました。私は「チーム医療」を選択しましたが、医師 2 名、看護師 2 名、薬剤師 1 名のグループで、実に有意義な時間でした。このテーマを選ぶ人は、他の人と協調する気持ちが強い傾向も

あるのでしょうか。また司会の看護師の方の「司会のスキル」にも多くを学ばせていただきました。

夜の講演会も堪能しました。その後、場外での懇親会もあったようですが、私は大学時代の部活（医科歯科硬式庭球部）のプチ同窓会に出席しました。メンバーは医学部半分、歯学部半分で、ここでもチーム医療番外編を学んできました。

翌朝は体調不良もなく、105分のマイクロティーチングで昨日作りこんだ授業をブラッシュアップし、すべてのメンバーが模擬講義を行いました。私が講義担当だったので、メンバーのスキルを取り入れながら最

終的なスライドが完成しました。講義は医学生も参加し非常に実りのあるものでした。被告人席に立つとフィードバックの内容に非常にナーバスになりますが、最近の学生はフィードバックのスキルも学んでいるようで、あまり傷つくこともありませんでした。

終わってみるとあっという間の2日間でした。今後は大学の教員や学生に強く参加を勧めたいと思います。最後になりましたが、ファシリテーター、事務局の皆様、本当にお疲れ様でした。この場をお借りして御礼申し上げます。



新企画“大学病院フォーラム”にご参加ください

横浜市立大学附属市民総合医療センター 化学療法・緩和ケア部 斎藤真理
(大学病院フォーラム企画担当者)

[2013年横浜で]

来たる6月、日本緩和医療学会学術大会において、「大学病院における緩和ケア」にテーマ

をおいたフォーラムが、プログラムに採択されました。日本緩和医療学会では今まで、大学病院というカテゴリーで緩和ケアが討議されることはありませんでした。新たな試みです。

[フォーラムの目的]

- ①全国80大学病院における緩和ケアの臨床・教育・研究に関する実践報告の場を作り、
- ②将来に向けての問題点を共有し、
- ③今後の日本の緩和ケアを推進する上でのプランを討議する。

ということにあります。毎年開催し全大学病院のご登場が叶えば、と目論んでおります。

[大学病院についての話題の広さ]

ちょっと考えただけでも、話題は尽きないと思われ

ます。大学病院では、各分野の先端医療が積極的になされ、多くの臨床試験が推進される一方、医学生、看護学生だけでなく、多くの医療職の卒前臨床実習の現場ともなっており、基礎的な臨床教育がなされています。

多くの大学病院が、「がん診療連携拠点病院」となり、さらに「がんプロフェッショナル要請プラン」にも取り組み、新たな「がん対策基本計画」による緩和医療学講座の設置など、緩和ケアの日進月歩に貢献しています。

一般の急性期病院よりも多くの専門職が働いている特徴もあります。プロフェッショナル軍団、人材の宝庫であり、また、各職種新人の修行の場ともなります。地域の核となる働きを担っています。「お国柄」というものも、きっとあるに違いない、と想像しています。興味深いです。

[第1回のコンテンツは?]

第1部は、7大学病院から、ご発表をいただきたいと思っています。全国津々浦々からの発表を楽しみにしています。今年度、当会で実施した緩和ケア卒前教育アンケートや全大学病院の緩和ケア診療アンケートの結果報告も含まれます。

第2部は、「全国の大学病院における緩和ケアの進歩、課題」と題して、ディスカッションの時間を設けます。日本の緩和ケア教育、臨床、研究をリードしていくことができるようには、どうすればよいか。課題を共有し、進歩につながる討議をする、そんな機会になるはず

です。フォーラムの記録は各大学病院で供覧できるように発表したいと考えています。

[発表大学病院]

年明けの演題募集が始まるころに、企画担当者からお知らせいたします。ご発表につきまして、関係する皆様でご検討いただければ幸いです。

横浜での第1回フォーラムの打ち上げパーティーを開けることを期待しております!!

(この幹事役が一番楽しみだったりします)

ホットニュース「第17回 日本緩和医療学会に参加して」

東邦大学医療センター大森病院 緩和ケアセンター 下条奈己



2012年6月22、23日の両日、神戸市神戸国際展示場・神戸国際会議場・神戸ポートピアホテルにおいて第17回日本緩和医療学会学術大会が開催されました。前日までは台風の影響で悪天候でしたが、当日は晴天で心地よい天候に恵まれました。

この、日本緩和医療学会学術大会には託児所が設けられています。私は、現在5歳の娘を3年前からこの託児所に預け学会に参加しています。娘も異年齢で初対面の子どもたちとの出会いを楽しみにするようになり「新しい保育園に行く」と毎年喜んでくれています。さまざまな外部の研修は休日や平日夜間のことが多く、参加したくても難しい中このように学会で託児所が設けてあるのは、自身の学びを深めるためにも、そして学会終了後の娘との観光も楽しめるため大変ありがたく思っています。私は、パネルディスカッションの“がんを家族にどう伝えどう支えるか”に参加しました。親ががんになった時、子どもにそのことをどう伝えるのかについて話し合われました。それぞれの施設で多職種による患者とその子どもへのサポートがどのように行われているかについて発表されました。「子どもに真実を伝える必要がある」と説明

するだけでは、患者とその子どもの対話は進みません。ですが、医療者が必ずしも子どもに会うことが支援ではなくまずは子どもの療育者と面談し子ども

の5年後、10年後を考えて話し合いを持つことが大切だと聞きました。普段、目の前の患者さんの何歳の子供という目で見えてしまい、今何ができるのか、何を伝える必要があるのかを考えていたため、ハッとしました。子どもはこれから成長していくので将来を見据えて考えていかなければならないことに気づかされました。また、子どもには伝えたくないと言う親の本質として『病気への不安』『死への不安』を自分ですらうまく扱えないことがあるとも言われていました。

やはり、まずは患者である親に対しての十分なサポートが重要であるということが分かり自分の立場でできることからはじめてみようと思いました。

本学会は多くの職種による患者サポートや一般向けの情報提供などの取り組みが報告されていました。この取り組みが社会でより良く生きていけるものへと発展していくと良いと思いました。

異動しました～あそかビハーラクリニックに来てください！ あそかビハーラクリニック院長 大嶋健三郎

本年5月に昭和大学病院を退職し、6月1日より京都府城陽市にある「あそかビハーラクリニック」に着任しました。西本願寺が母体である当クリニックを紹介させていただきます。

日本でも数少ない仏教ホスピス。医療スタッフとともに、僧侶もチームの一員として患者さんのケアにあたる、大変珍しいホスピスです。あそかでは、普通の病院では聞き逃してしまうような患者さん・ご家族の不安なお気持ちも、様々な職種がチームを組んで共に悩



みながら「いのち」をみつめていこうとつとめています。そして、がんという疾患からくる様々な不快な症状を緩和することはもちろんのこと、「その人らしさ」を支えるケア心がけています。また、薬剤師は日頃の回診やカンファレンスにおいて、病態に応じた薬剤の適正使用に必要な情報を提供するだけでなく、患者さんとその家族が納得、安心して治療、生活できる環境を提供する事も症状緩和と同様に薬剤師にとって重

要や役割であり、個々のニーズに沿った服薬指導を行っています。栄養面では、患者さんの「食べたい」という思いを満たすだけでなく、「食べたくない」という思いも理解することを心がけています。また、見た目に「おいしそう、食べてみようかな」と思っ

て頂ける食事、形式にこだわらず、家庭的で季節感を取り入れ、「食べたいものが食べたい分だけ食べていただける」ような食事の提供を心がけています。そして、あそかの大きな特徴はお坊さんが自然にいること。僧侶は日常のどのようなことでもお手伝いをさせていただきます。散歩のお手伝いやお部屋の掃除。もちろん法話をさせていただくこともありますが、宗教を強制したりすることはありません。あそかでは、「いまあるひととき」に笑顔とぬくもりを添え、ご家族と共に寄り添うことを大切にしています。日本でも類をみない仏教ホスピス、ビハーラ病棟。医療者と僧侶が協働し、他のホスピスではなしえないケアを目指しています。